

出題のねらい

㊦は、動物倫理学を扱う評論からの出題です。本文にもあるように、通常我々が思っている「動物倫理」と学問としての動物倫理学には径庭があります。なんとなく知っていることだけではなく、広い視野を持って学んでほしいという思いから選択しました。他者に思いをはせることを主軸としながら、具体的な議論と抽象的な議論がなされており、このあたりを整理できるかがポイントになります。

㊦は、鎌倉時代の説話集である『十訓抄』における「第七思慮を専らにすべき事」から出題しました。古典単語や古典文法の基礎的な知識問題、本文の読み取りが正しくできるかどうかを問う問題を中心に出題しています。説話集では、本文から読み取れる教訓を読みとれるかがポイントです。今回の出題範囲では、子どもの育て方について間違った育て方が述べられています。何が良くて何が悪いのかを正しく読みとる必要があります。



【解答】(50点)

問一	a 携	b 私腹	c 風潮	d 丁重	
	e 妄想				(2点×5)
問二	I ウ	II オ	III イ	IV ア	(2点×4)
問三	倫理とは人				(4点)
問四	ア				(4点)
問五	エ				(4点)
問六	常識				(4点)
問七	人間が動物の基本的な運命を決定でき、その権利を意識せずに主体性を与えないこと。				(6点)
問八	ウ				(4点)
問九	イ エ (順不同)				(3点×2)

【解説】

問一 漢字の書き取り問題です。bで至福と答える誤答が多かったですが、全体としては正答率が高かったです。

問二 接続詞等の補充問題です。ほぼ毎回出題している基本的な問題ですので、正答率は高かったです。

問三 筆者の考える「倫理」の意味を問う問題です。字数を指定した書き抜き問題としましたが、「日常的な日」や「それについて」など、20字以下となる部分を引く誤答が多かったです。まずは設問文をよく読んでください。また、付線部の直前直後だけを探すのも安直です。それでは問題になりませんので、もう少し本文全体を見渡して探してほしいものです。なお、指定字数で引ける箇所に、「倫理とは常に「人間倫理」であって、動物倫理ではない」がありますが、「～とは何か」という問いに、「～ではない」という説明は不適切となります。より適切な部分がありますのでそちらが正答になります。

問四 語彙を問う問題です。「紛うことなき」は間違えようがないの意ですので、ア「純正」が正答です。比較的正確率が高かったです。

問五 本文の内容理解を問う問題です。選択肢も難しくなく、正確率が高かったです。

問六 空欄補充問題です。正答は「常識」で、いわゆる常識を持った人々を指す文脈です。誤答には「一般」が多かったです。「一般」としてしまうと、形状的な文脈となりますので、不適切です。

問七 「不当な偏見」の内容を問う、記述式回答問題です。採点基準は、「人間が動物の基本的な運命

を決定でき」で3点、「その権利を意識せずに主体性を与えない」で3点です。「意識せず」を「当たり前だと思う」とするものは2点としました。正答率は著しく低かったです。問題が難しく解けないというよりは、記述式回答の答え方を知らない、という印象です。本学の入試では必ず記述式回答の問題を出題しますので、対策をした上で臨んでほしいところです。また、大学では長ささまざまな文章を書くことが求められます。書くことへの苦手意識は克服しましょう。

問八 本文の内容を問う問題です。正答率は高かったです。

問九 本文全体の要旨を問う問題です。順不同で個別採点です。誤答としてはア、オが目立ちました。一般に理解される倫理という意味と、「動物」と「倫理」ということばの組み合わせが特異だという文脈であるため、アは不適切です。また、本文の論旨としては動物にも人間と同等の権利を認めるべきかもしれない、という文脈であって、人間も動物の一種として扱うべきだということは述べていないので、オも不適切です。丁寧な読み取りを要求する設問であったかと思えます。



【解答】(50点)

問一	a ウ	b イ	c オ	d カ	e エ	(2点×5)
問二	D					(3点)
問三	ア					(3点)
問四	ウ					(3点)
問五	愚かな人々は、生い立ち行く将来のことを、考えなくなってしまうのである。					(4点)
問六	(主語) 親 (意味) 生きているかぎり					(3点×2)
問七	好運は努力や才能にはよらず、いつか巡ってくるものである、思うままに生きればよいという親の教え。					(7点)
問八	とりどころなき徒者					(4点)
問九	(流れ) すべきことをきちんとすること (棹) 生きていると巡ってくる好運					(3点×2)
問十	ウ					(4点)

【解説】

問一 助動詞の意味を確認する問題です。a「べし」の意味には、推量、意志、可能、当然、命令、適当のように様々あります。該当箇所を確認すると、「箕裘の業(父祖の業)を大事にして、その方面での修業に励む」ことをすべきこととして捉えている

ため、選択肢においてはウ「適当」が正解となります。b「らむ」は現在推量の意味であるため、選択肢の中ではイが正解です。原因推量かどうかは問うていません。c「つ」は基本的には「完了」もしくは「強意」の意味なので、正解はオです。d「む」は、「べし」と同様、推量、意志、仮定・婉曲、適当・勧誘など様々な意味があります。該当箇所「大した働きもしないのに、何となく好運を心に期待することについて、推量、意志、適当・勧誘で解釈するのは難しいので、選択肢の中ではカ「婉曲」が正解となります。e「なり」は「断定」や「存在」の意味を表わすので、選択肢の中ではエが正解です。

問二 主格の「の」を見分ける問題です。A「ものの心つかば」B「そのかたの営み」C「親のあまやかし」E「後の毒」は、それぞれ「の」が体言に接続し、前接する名詞が後接する名詞を修飾しています。一方で、D「乳母のもてなす」では、「の」が動詞「もてなす」に接続し、「乳母が世話を焼く(こと)」と「の」を「が」と置き換えて解釈できるので、A、B、C、Eとは用法が異なります。よって、Dが正解となります。

問三 文脈から判断して、適当な助詞を選択する問題です。空欄を含む該当箇所は、「その子を教へせせがまぬ(その子に向って教え諭し、しっかり聞せる)」ことが「不便なるに(不都合なのに)」としており、後に続く文ではその該当箇所よりもさらに子にとって不都合なことが述べられています。よって、選択肢の中では、「さえも」と解釈できるア「だに」が正解になります。

問四 文脈から判断して、適当な接続の言葉を選択する問題です。空欄より前では、すべきことをしない人々は、仏神や主人からの恩恵に預かれないことが述べられています。一方、空欄より後は、「前世の因縁ですべてが決まっているという考え方は、確かにその通りであるのだが、大した働きもしないのに、何となく好運を心に期待するというのは、あまりにも浅はかな考えである。」と解釈できます。空欄の後の文で述べられる意見は前文脈を根拠としているため、ウ「しかれば」が正解となります。ア「ざりとて」も後の文の前半部分だけをみれば選択の可能性があります、さらに後の文まで読めば不適であると考えられます。

問五 傍線部自体は「生い立ち行く将来のことを、まったく考えなくなってしまうのである。」と解釈できます。ここでの主語は、同一文中の「愚かなるたぐひ」

一般入試／国語(後期)

です。離れた箇所にある主語を補って解釈する必要がある問題です。

問六 この問題のポイントは、「あり」の「生きている」意味を文脈から判断して答える点です。また、傍線部直前の「われ」が主語となる点もポイントとなります。該当箇所は会話文であり、この発話は、子を悪い方向へ向わせる親の発話を想定したものです。従って、主語は「親」が正解です。

問七 傍線部の後に続く文から、傍線部の「げに、さり(本当に、その通りだ。)」と思うことによって、子が悪い方向へ進んでしまうことがわかります。さらに、傍線部の前文から傍線部の言葉が「荒涼のことをいひ知らせつれば」という必然条件から導かれた言葉であることもわかります。「荒涼のこと(とんでもないこと)」とは、親の言葉である「人の報いは～思ふさまなれ」を指しているのです。この部分を指定の文字数でまとめます。子の後の行動を考えると、「好運は努力や才能によらないこと」「好運は巡ってくるものであること」「思うままに生きればよいこと」が記述に含めるべきポイントです。

問八 「性のきわめて不覚なる」は、連体形で名詞相当の表現をする句であると理解でき、「いたって愚かな性格である者」と解釈できます。同様の者を指し、さらに九文字である本文中の箇所は「とりどころなき徒者」となります。

問九 「流れに棹をさす」は問題文の注で述べられているように「流れに乗って勢をつける」ことです。つまり、「流れ」は本来ある後押しで、「棹」はその流れをさらに加速させるものと理解できます。これをふまえて、傍線部の直前をみると、「あるべからむ振舞を用意して、そのうへ果報を待つ(するべき事をきちんとし、そのうへで運の到来を待つ)」ことが「流れに棹をさす」ようだと言っているのです。「流れ」(予めあるもの)は、「あるべからむ振舞を用意す(するべきことをきちんとする)」ことであり、その流れに乗ってさらに勢をつける「棹」は「果報を待つ(運の到来を待つ)」ことであるとわかります。

問十 日本文学史における各時代の主要作品を問う問題です。問題文にある通り、『十訓抄』は鎌倉時代の作品です。選択肢では、ア『古事記』は奈良時代、イ『宇治拾遺物語』は鎌倉時代、ウ『奥の細道』は江戸時代、エ『源氏物語』は平安時代の作品なので、ウ『奥の細道』のみ、明確に後

の時代の作品であることがわかります。

【現代語訳】

ある人がいうには、人は身分が高くとも賤しくとも、物の分別の心がつくころになったならば、若い頃から主人に仕えて、自分自身を省み、家を起し、身を立てる道をよくよく考えなくてはならない。何事についても、我が身を甘やかさず、父祖の業を大事にして、その方面での修業に励まなくてはならない。愚かな人々は、親の甘やかしや、乳母が世話を焼く(こと)によって、「いつもこうなのだ」と知らず知らずのうちに、思うようになってしまい、生い立ち行く将来のことを、まったく考えなくなってしまうのである。

また親自身も同様で、かわいい子には「罪」という言葉すら忘れてしまったのだろうか、後々の障害となることなど考えもせず、子に向けて教え諭すこともしないし、しっかり聞せることもしない。それだけでも本人にとってはかわいそうなことなのに、いとおしきのきわみには、「人の運勢なんて向こうからやって来るものだ。働きたいかにもよらないし、能力の良し悪しも関係がない。今に好運もめぐってこよう、私がこうして生きている限り、わびしい気などに落ち込まず、思うままに過していなさいよ」などと、とんでもないことまで言い聞かせてしまうのだ。そうでなくてさえ、心というものは、悪い方へ傾いていくもので、「本当にそうだ」と思い込み、もうどうにも手に負えないほどとなり、悪い仲間を語らい、酒盛りばかりを好み愛し、博打に狂い、手のつけられないならず者になってしまうのである。

これも親と子の思慮が浅いことから起ってくることである。こうした者は、たまたま官仕えを思い立ったとしても、そのような振舞に及ぶので、心に留めてくれる主人もいない。仏や神は広く人々を哀れみ下さるのではあるが、不信の者はその加護にあずかることは難しい。主人は誰でも分け隔てなく雇い人を守り育てようとするのだが、無用の連中には恩顧も施しがたいものなのだ。

それゆえ、前世の因縁ですべてが決まっているという考え方は、確かにその通りであるのだが、大した働きもしないのに、何となく好運を心に期待するというのは、あまりにも浅はかな考えである。そういうことを言うものは、極めつけの面倒くさがり屋で、いたって愚かな性格の持主だからであるのだ。まずは、するべき事をきちんとし、そのうへで運の到来を待つのは、水の流れに棹して進むようなもので、その実現は、きっと早いに違いない。